正寫相生源氏

天

相生源氏の叙

むかしの源氏ちよ十四帖。今はいま
源氏ちよ十帖。こゝに猿の
毛ぬ。ぬらぬ猿四つまじを。
慰むばかりの宴のてぐさ。
婀娜ふ事ぬさんいと哀れ
手塚つぐまの劣らぬ情の偏ぬ。源よ縁を
うけ取ぬ。高ぐけがこと世態の生写しや

いつ屋のうへぬ。玉泉
ゆうぎの夕顔の。花ゆふ
住吉のまつ。明石の
うらは。嫁ぬ。
蓑のとの。笠を。
ぬぎ。
屋敷のおい。宿
蓑笠の。雨を。
ぬぎ。

ゆうさん
ゆこの。宮の。
わかつ。
つま。
をこひ。いのまぐ。
なつ。ぬ。竜の。
いまぎ。
ゆみ。
うそ。

貞
とうひのやうふいらいてもあ
そのうんびんをいとそうるのどざいません
まことあがつろうこいらーてさうどもわ
えくまーごけ いまーごふまーご
かーごーごーうーひーろーいーてもまーんで
ございますぞいてーうので
ございますむう
ふ
こうとひいかまもひさーぶりで
ふとーうくとーどんそれるのごーうかーごろは
せんとーいまーてーんそれぞーうーうーのごーらう
あのせーうあまーすーごーぶーつれてあさーうるも
しらいーごーやまーいーうあーらーうみーごーおまーごへ
おりーえそかーうそれーうーへむちーうそあーうと

正写相生源氏上之巻

第一　北嵯峨の草庵

東都　女好菴主人著

あるに何事の時なり。花洛北嵯峨の片ほとりに。表は冠本の門を構へ。庭ふ
かく山遺水をんぐ。いかゝ床しくもそゝ做しける。主人は年の比四十ばかりの
寡婦なり。只一個の女児をあるのみ。いのちなる筋目の人なりや。純て男といふものをは
ゞ。四時の衣裳朝夕の菜ものゝ調ふ。婢女二三人ばかり。老爺一人
そなへつゝ。豊かにねんごろに。たゝ世を送る。春は如月の中旬。堅き
小春を待つる。梅の香を待つる。菊を待つ。仮のゝ花盛る庭の花ゝ小雀ら
世間なれぬ母なるを。あるにて鋼ふ。ちゝ俱り。倶に酎ふ。若やかしさ。女児青物は椿
端よ。ゝて居らしが後ゝ。アレ義母さん。御覧ふさい。なるゝ大方咲りゝ一昨日
菓ゝを。ゝしゝ。なのゝでございますせうゝ。様ゝ。かゝいゝゝやゝゝゝゝゝゝ母親

沙汰いうかづまの「そんなようなる翁でさへ」の仰せ。子を慕しがる人間の情。都て人間いかほどの情がおいと思ふか知れぬ。おおの祖父さんハ花華好で常に立派か物好き。辞世れと云へ「残るハ子孫家屋敷と借銭ばかり夫も他かりや空けれども荘官どの「奥に入れ」。田地の元金三百あまりハ代々先の家ハ傳ハつて家督田地。手放して先祖へ済ぬと思ふてゐたけ共。他せいふるも大金で。結局手ハ出もおいそれ。知つての通りお年のうへ。新茶てうれハ私の役目。何卒して取戻して見せ。おおの祖父さんの差で祖父さんがさぞお歎びかさらうと思つても男のなでさへ及ばぬお金を女の身で届かぬなるとあてもなく朝小晩よ気にかかり。神仏へも無理をおかけ。お蔭ハ世間おまへ。ありがたい。通り。室町さんがおおの噂を伺ひかねて出遣ハ光さうと。水菴さんの取次ヤレ嬉しや。元銭あげるを結代り。仕合せ金ハ金で次第ハ光さうと。水菴さんの取次ヤレ嬉しや。元銭金で田地ハ直ちに元へ返る。ハハハハハ。ハハハハハ。ハハハハハ

ぢ沙汰がいらう。といそれもモウ五六日。大方間もなく法いわどに住まれ
変じても。あるべ今日うも住ずよいぞやト。実は見せおりゝ親かも。まこと拙ぶ
作者ぶれう。折ふ来るいこれ地の豪富。弓削道鏡といふ坊主。これ年六十
可されど達磨年ようい。若くうあるゲ。日比の自慢。これ流行点取投句。沙
者も者勢もいひあるひ。行事も法華経ようう。この生新。有次運生。紀徳判。お者
彼事の初会のと。特こゐれてゐおもいそれ。かの道具はもの名よく深りて功者
あり。女は勝せとうせんと。折く代句もあてやるけど。音勢は教えと。偏ゆう行ば
道具もいと情つゝど住うとひ。遊ぶみはよれ女子の世帯。推は遠者内藤の
ようすで言あく借りなの。中らひあれが家処へきて。何ぞ意母大分生面目で
イのういの。ナア二沙汰お様ようお嫁。
彼も玉極なのの子は了簡がいコウ〳〵音勢だう。室町さるは誠は美男でせ
しく女とい藏法可愛がゝゝまゆるとゆはゝ。おあい僥倖ざ。沙抵なわどけ抵人

のいすと。倍可愛がつく掌で乾〳〵ようさうゆるだらう。折角むつちりとゝと頻繁ことと掌な
くされ抵やうに達成つひるヨ。アレ名お敬さんざ。私は其抵もとこ考えいヨ。おあの敬知ゝ
ても。先ず教えて下さらア。イのあゝマア丈ゆ。自己が教えてやらうゝ。ゆこいやどウトまざ
男りのいなのふゝ話や。心がてゝ。石山女児。俳田の夕照ちんのうと。面報くゝと証てゆ〳〵ざう
もまざ彼通りでどぶいまするゝ。今回は殿あげても。イの抵ざらうゝ。楽どらもまゝ人のサ
他の子借をうるのよ。ウ十四ゆ。あれが堂でうゝ。実ゝ人ゝ。作りのでざざいまするが。イの故彼抵で
出ざいはあう。その解まんざゝ。る庶でもあいゝ。思ひまんぶ。笑ちやアおあの十四ざうね
のうゝ。俳そど晒抵て功者ようゝ出ることゝ。ゝる子。イの赤エ。丈ざって十人ア。イのゝふるなりのサ
今ウかゝ。色事が俳山のつゝ。ゝ抵。大変ぶ。者のしゝウ。浅ま。さん小仲と小女児ふやア。
油彩ざあゝれ。といふ俳の通り。色事が出めゝ。難ざあさからうゝ。初花せ人咲きやア。俳
分間ふのゝと言るゞ。
なのゝかゝ。難も汚ま。ゝゝ。なのゝ向お。
ちやア世早い方らしく。コウト去年の家内
猪児さんで困りまヨ。イのゝ人の嫁ふやア。

宮町さまい大の腎張で。得手りのも大きいとらふ嘲しご「まさ子廉てお言うさるョ
「おふくそりやァ心ぞ。あらし左根ア大物で。無二世ニて実りけられちやァト眉の間よ
皺をよせ。楽ざる面持これさまも。ちご楽ごるい丈処だろう。実的忠角の祖もおく。あごく
れて多をひ出るあ「おお昌いろふ中まぐ。実い丈と楽ますのさ。ア「て怪奇でもしてき
ゑ流おさ。豆孤ッう紅ぐごらまるう「牡こもなまで養もかりごろ十二まさう左根ア
ゑもあるめ。あのし街毒さん。娼妓坊ちんでをえるのふ。髭ア大きけもやァ。十三でも十四で
もモウ廓「出ッく客をとふせるが。左根いふのい丈処の宅「出入の人ゑまさい他の娼妓「ス
別楽ごく来る方人ゑ。いづ毛四十以上の人ゑ抗挑として貰ッて。笑ッう出ッ中ア。左根せ人ア
毛やァ。伊根ア強義ゑ出舎ても。ア遠神ア。左根でねと悪くさると。怪奇ア
困る位いふゑご「ヨヤ」左根ねね。伊故まる四十以上の人ゑ情さまねね「ハテサ若ェ方ねる
ゆご戦場と言てん神。根の根ッ子ゑ。山椒の根ゑ木のやうみ。実立るうう溜らねね怒ア
四十以上のり居ゆ。たと勃起ても伊変ゑ和ッうご。ふうう中するごうう。甚ゑ「おお情ゑど

功者で。ゑゑ「雑妓を痛めるやうおさい方神「ムた根ゑ子「ア「ア「おおあんぞア伊
楽のさ。伊根ア人ゑ別まさう。大概光えご。けらう。考てうえね「ナ「まくモウ人「いゑさう
ゑ根ア方ゑ。ア方ゑ。ア嘘ご初めて別て貰ッる人い死まで変「て
方まるりのごやァね「ョ。そりやァ男でせ人「左根ご。ゑ「ッご「ふ成ちやァ「ア見えて「ゑ
ゑ「ア「ど「おおあんぞア根のゑさゑ「伊前「ことやァ「ぞ人きて祈ご。意ゑさゑて
ゑるゑ「ッて「まるお若根ア若楽ごうるりのうゑ「イヤまご「左根ア人ぞら
根ア「ア「ア雑終い中戯。音勢ごうのゑゑご二出ゑ
気ふゑるう「それご実ゑ若労ゑ「丈ゑ「ッ自己ご。抗挑ア「てやらうご毛ア。左根ア
ご大丈夫ご。それごやァ悪いう「左根さ子ト考る「伊も自己ご彼根ア子も見ア根ア
お玉根ゑとゑるやうゑりゑて。見非抱て廉て坐て丈の方やァね「ご。左根「て出せ人大丈で
おあ人ご安ゑるゑ方ゑ方ゑ。ア「ッのご。甚処でノ街毒さん彩ア方ゑう。見て「ア方ハ
立派ア身のう人ゑ成て。稼ゑ金ゑ入ア「けま」ど。既ゑ娼妓の抗挑でせ「丈ゑの祝義ア

をてやるうけ。深窓に養はれて。まだ世ずれせぬ娘ごころ。自己が小袖に襷祝儀として。
金を十両ばかりあたへ。「こゝ」晩で十両あれば安堂でもねつて「十二そりやアマア」の根でもよ
いが。彼兒が美和それが豆ガトもの十両の祝儀と云てごろせ他人に知れける女兒。ゆゑ取得とい
ふ事なるを「そこ」処はおのづからよく先根言ひ〳〵。のでも御殿に出るあやア。先根
〳〵て往根」と思ひ〳〵言て見根「保細はぬ」ハナ沙「丈あり先根言ひもそう。晩
まで〳〵お呼ばさいナを「そよ〳〵晩の来やせう

第二　初寝のまくら

沙多い者勢と言葉〳〵。何でも先根せみやあるぬとい〳〵。苦労もきのく居
ませびそ先根よお思い先見ち。まづ酒肴おど齋して。母まよ根舞時おハよしと。
強く設けの国へ入る。沙多いまるガ手で把〳〵「サア往ア。そ〳〵て叔さんの根せう
作。自由まおつて居るのゴョこれ〳〵との紙を持ていきナを「なんぞ私い怖いやゝ
更沙「十二サ怖いこともなのもなかいちナ。先見さんが思いやうまい去やい〳〵。サア往ショト

いちれて恍惚ふの恥ずかしく。面なのくぶめる我屏風をうあけ沙「丈あり お情
ヤ申ましヨを「要細美和スコウ音勢ぞう。サア帯城解お先根してち〳〵「這入て寝る
のゴおを「ち〳〵可笑まへを「何もち〳〵いるのいね。サア今夜はお前と自己と二人婚祝ぎ
ちし茶縁と土瓶の婚禮は神武以来あるめ〳〵〳〵「何ごと」十二歳のヨヨ
さり〳〵早く這入ちと。「どう得よ入のめる我。先見を先て無理よ引こみた見先
先根堅まして居ちやいけ根」すりと沙方「ハ傍て。そして見てあげて自己が見の
うてなげるのゴを先根〳〵。そこ処でこれ枕の下「手を先いと入ます。丈ち彩しやうこと
いふのゴトを先見の目を伸し。音勢が肉根」ちと入ると「アレ叔さんトいひあゴ
服をすゴやる先「見サそれゴ中ア往根」丈でもこそごろこりのヨを「マア先延をオ
承修しおくゝちやア。力祝さ目のお家みやアい〳〵根」。サアこを廣げヨを「彩うへ
先「今先根ゴ〳〵トまをやつてむつこり先〳〳る顔係あゴつまをこ〳〳ゴ。
もや〳〵して指まんまこを先ど。摑むゴ〳〵ゴあるぬ。爲もの客をかあい〳〵

しく文よりぐん〳〵ふをやをそ。あ剛ゐくふつうとしゐる。中みちんぞり
埋く紅香。それまりうまい長元毛の。四五本そえて手ふさゐる。生仏性よさ在是が。
一物亀既を拭あげて。ぴゆ〳〵と勢起えてば。善物が手を特そえて「サアこを戒
極つくゑおさせ」ヤト言さぞり直よ放す。生手を押へ「右つう強つく。上へ出
うりや」やつうして元ヨ「をう〳〵ふりんぞ」「十二月元ヨ」と出く氣を
移させ。そろ〳〵極て出門「中ゆび一本ゐく見るに吐嬰といふい更よゐれど。
ずる〳〵ゐのもび先ゐをうと。縁て准備の通和散嗜みてとれゐて〳〵と。信巷
仏亀既より看首の下の方まで。よく塗つけ。さてまゐ善物が玉門のまわりへ
塗り〳〵塗上まゐば「仏ぞ上深よ奉味が悪いよ。私い浄水よ住て来らう」「十二
奉味の悪いとい旅。アア浄水い旅よ〳〵」「サア是うらかうするのゴトくうと剥ゐく
一物を。押なてぐふよ在是い。それ大むく名ふゐる。弓制の道筋が子孫まで在是
まで三十八代遠の裔でも居といそれぬ。血孫のゐくしを一物い是よ新くゐる火ぐ

の仏年を取てもゐやんぞこと。いまを里切ゐ後火のぐ〳〵。血気性の若ものゐる
ゐの〳〵劣らぬ威勢ゐれど釜の蓋をゐくるふぐ〳〵入是りのようも入まるれが。
四方へ絡つく這入ゐま気ゐれが在是り。少〳〵困ゐる仏特。されど宝の山より。
手我むゐ〳〵くと通和散をやゐこと〳〵と塗ゐま〳〵。根の下ゐうを生をゐ〳〵こみ。
ゐ方の肩を在門ゐう物ゐ。変がつゐ〳〵ちよと〳〵〳〵とふきぞみよ腰をつゐへば茶
の寿特よずゐ〳〵と亀既ゐりいそいつゐ容ゐ。善物いこれと元上気して。耳生
頬ゐを生ゐ赤ふゐ〳〵。紅をゐの元て「アア」仏ぞゐるいやゐでアせつゐいト
頭ゐよ上へ変り出ゐを。在是肩を在ゐつけ〳〵「今ふよ〳〵なゐるゐ世話元ナ。丈
根よ痛くいなるめエ「アア痛くゐいけをと。をアーしいい「十二今ふぞん〳〵
よくゐるかゐ。腰を坐ゐ新ゐて元ゐトまゐちよゐ〳〵と早腰よつゐひゐれ
ぞ在も〳〵。かの大物い元陰まで。ぬゐ〳〵〳〵と這入ゐ元来新開の高ゐりよ
く。陰茎の亀既を赤子の口でくゐ〳〵てゐるやうな是ば。道是い現をぬゐ。善

勢ゞ頻やロの端を舐ちゃ〳〵と聲まで〳〵そなた可愛ゆるゆ喰ってんかさあく
一生懸命よ。ずき者えまで。音勢もこうなると。囲中がむづ痒きやうに見える。伺
変とれく氣持よけまづ思ひまづ道具が首の脇絨毛の手で者あつ者〳〵
フウ〳〵ハア〳〵息づひ。せこ〳〵あれを道具いそあ少〳〵も情えられを頻てドキン〳〵
ドク〳〵と指の呑口指るごく腎あ子宮へそぢれうけ。ア〳〵と愛中の矯
ア。當下溢まる老やなのんと接足をく〳〵隔紙の外へ来りつ外を待うけ。
耳を澄して動靜をきくに思ひの外よ出来こやうす。道具がグウ〳〵スウ〳〵
嬌る我ばてなのぢお奉ふあり。年い取ても永き年月。一義張る陰つ。ち
ちゃぢ右より〳〵温り氣出て。湯臭さ〳〵濡るぢ有れを。何少れく上氣して。
耳も茎若ふあるぢり。ちや指の内よ道具い。紙をちつく拭き方を。教えあど
するやうちそ。ちや見ずと徐〳〵。れの男が子舎へゆりゆく。音勢ハうて吹ふ
き〳〵。丈身も何ぢを交合ん〳〵と。思ふ心いなりあづ〳〵。あを枕絵ぢ〳〵ちぢり

どふらふ物を。と思つてふ今宵始めて味を考り。おるあど悪くもおいやうぢぶ
仏んぢちぢっく〳〵つて。接さ跡ちで例とる。どこやふ遠ってふ指。それよ如る〳〵
拭てる〳〵。跡ちり流まる氣味ちとる。年や仕ってなる。若労をしう
氣を煙でちるやどちりのでもおいと。真の甘美をちぢ考ぬ。恍惚る心ぞ道理ふ
。

第三　室町のゆ紀

愛よ始ちり記〳〵る。吾先公と受えしふ。日本一の長者ちて。國々数多領〳〵
ふゆひ花洛室町よ所を仕ゆ〳〵住ゆふをりて如此いり。ふ君いゆぢ二十一歳。
殊よ容色双び者〳〵。女ょ〳〵でいるゆ欲き。やを姿ちて在〳〵けをぢ。屬ふ女房ふち。
甲乙作者〳〵慕ひゆみふせ。ぢう形〳〵と居膳ハ七五三やう五〳〵やう。料理よ思ハ
者ふをとも人の心を先祖ちる〳〵。常よ眼お色し物をぢ嫌ひ。珍ゆ〳〵我好〳〵
り仕ゆて。人品のよ紀長髪や。或ひる地黒ふの福祉。大振袖の高髷ち。平生の
ちりて面ふ〳〵ぢ。紅白粉もうつちり〳〵。水髪結四ろ郎杏ふづ〳〵の。結ぢ髪

さて、国は法まで。そは風俗を好こめば。奥女中も自然。そを移りて
意氣作里はいおすりはおづこ下この女の如くいえもあらず。されど家くの
側室はうも別て寵愛ありのふ。行奥といふい十九歳。色白ふ〜鼻筋通り。
眼はぱっちりとして黒眼ぐち。びび睨まるるとそ。そつとするなど色氣を含
む。桃代といふ二十二歳。色いやし。淫けもど。地雑の艶い色の如く。口元眼
元ふ愛敬あり。そは人氣性でいはまよく。人の氣をとる上手おり。ゆえ義俠
にて大り肉慾致いさのこ宜うう祇ど。今流行の旅妻福出むつりとして艶敬
なり。殊ふ一義の上手まて。男を泣せ弄る上開き。見ふ上
越せり結ぶ。この三人を強さ。されば吉光が寵愛して下方風は身をかぐ
らせ。夏冬素足の花簪低り。そは解の側室七八人。されが吉光いかる〜。
聞つる石〜。ゆえ世方より。往なひて一晩ふ。三人五人の時もあり。ゆえ三人を抱諸は
楽きのふ断るなり。若ら深はけふる抱の節句。祝ひりのるあれが怨ぐっこいが抱

ちも悪いきか一日ふ飲ませ。楽〜きうんと登の祖より。掛りの女中は内ぶなり。
ちやりは著るや著ぬ著るう。奥御殿をそ切る。紙子の蒲団を寝つる祇。
吉光は中ふ坐〜。そは中ふ十人の側室をずつ坐べ。手自寵を
出〜ふ。まづ一番ふ当りしい。真の陰茎ふて本手ふ。二番より五番
までい。左右のまた右の足ふ男質一本ッ結つけて。例ひよを嬉らすべ〜。ゆえ
六番は入かり。芸の信茎はて蒙印とふ〜。七番より十番までいおの如く
男質で。嬉らせんとなりられば。さそは一番と六番の寵と共。肝心要あれと。性
密を呑ぐ寵を忘くふ。あけて悔しき他の数一番いかの手取。義俠が当りと
大歓びさて特色〜の服るすせ。右り左へ引つけて。まづ義俠が服ひ〜ひ
ろげ。含粉るあく実入まるが。義俠い例の位上手。ちやスウくと注出〜手足を
かくみりもなる〜。ゆくどうもそまりつと。上の方を力伝いれて。おつき抜
ぎ〜て下さいます〜。ゆモ雑ぐ陽るやうざと。絡入る斗りの数を出〜。身を

めづいて抱きはく。吉光い左右の手。左右の足首を働かせて。上へ下へと突あがら。揺せらるゝ義経が。ものをもふゾレ上りそれ奥へ。頻よすりくづぶ。ぶ。突立ちへば男根いきりさく如く。竿が満て。ちゝ腎水も流まんとせるぞ。されを忘れて。あのまぐく。若つゝ歳漸を抱きしめ。足絡ゝ縮めて。ソレおもしろ。サア〳〵いくヨとはをすひ。ドツキ〳〵と。精をやること限りなく。陰水あふれてざら〳〵と。蒲蒲流るゝその氣味よさ。先より引き元四人の女も。今モウいくことする処よ。男貴を引ぬき。者ふ油揚さらつ毛〳〵。ムヒふ。ふつく物もいまだ。義経が。ぶりふ婚るをよて。ぶずるゝ〳〵と陰門より。精水をあが沢斗り。ありて。夫よりもまこと入ゝり。五葉和尚は異ものゝ。一回ふ。五人の女を法の戯ふ。ふこの夜を。ものを。仏の。も用ドさるおれが。ふ〳〵ぶ。為くて書洩しの。かゝて。告光さま〳〵の。楽〳〵みいまぐ。ぶ。ぶ。ぶ

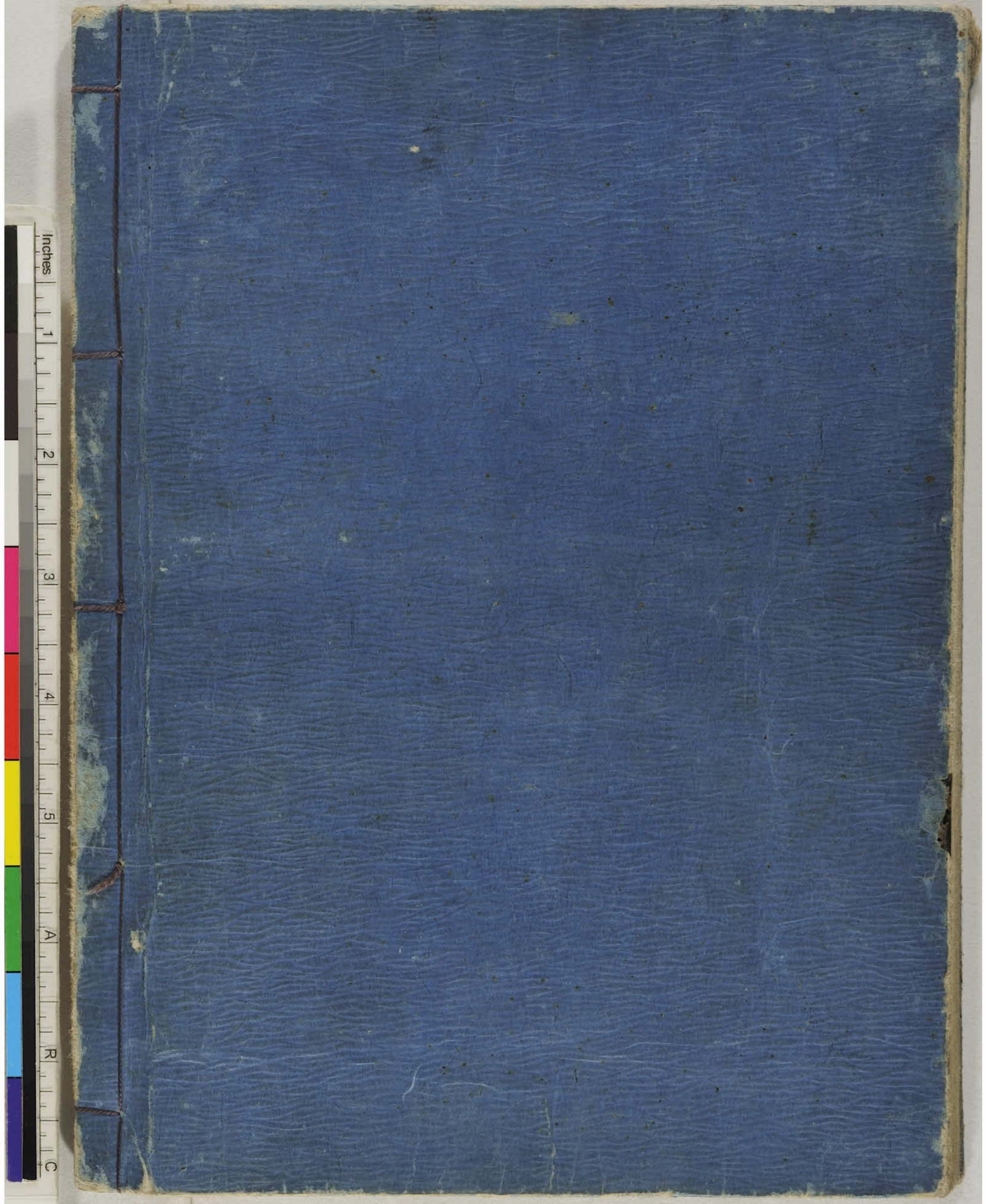
うちまもりて見たりける変に動じ人の気色あるべんと伸びかがみ
居住生垣の遥かより。裡を窺ひて一人の侍へモル〜こは色を沙弥といふ寡婦の
住居ゞ在と知る。和つ〜あ〜表えてト少て沙弥を不審顔ハ〜その
沙弥ことゆするを知ぐ〜ございまゞ。何の用で何方へ行ぬ
ぬ。サア分りまし〜此方へト命令をもれば後は立ちふハ年の程。二十こ
二十一二だろう。色白〜しく鼻筋通り。眉も遠山の色の如く。眼清やか
小唇赤く。いつのあも威かつ〜猛〜ぬそなた風俗を公家ものゝ武家と
もつかぬ打扮ハ。綾の小袖に二重紐子の繻地に雪紙を織出し〜る。被布の
やうなる物を着し。黄金造りの小刀。指貫袴もめかるべ。この侍が何と
宜く「当ふ〜まし〜る住居の風流少しゝ解せるゆとうとゝる。若し少し
の業内もせざど。推て知るべ困るべ如ならう。丈夫宜ハよう計らふて主人ゞ
分ぞつかうぬやうに。左様ならばトいひ〜切戸を明て去らんとふ
沙弥ハ怕りかの侍ゞ傍へゆきて声を低め「何方さまでおざいますもつ
遠ぞ。遥だ〜こなたでかおざりやせぬうト纏り立ゞ出所侍「こを方ゞ沙弥ものに
和主ぞ。門遠でかい彼お方ゞ尊ぶ〜も。室町の吉光さま。五男おさ遠
り成ぞう。言〜入まさ女児ゞ考勢。頼みお迎へあるべき変。此養老ゞ病篤ゆ
逢〜あつさをおもちの。お忍びでと分仰う。ゞ佐〜〜〜在下ハ。宛後佐栗と
やすゆ法。心為りゞおざらう〜ゞ。ハイ主人ぶ覚えのあること。アまゞ女児を
為る。女子ゞ〜ると知だりトいふを佐栗ゞ「イヤ大ハ主お袋。変〜〜心配ハ〜ぬ
ゞ茶兵衛の准備をゝ。ゞ佐の元ゞ結〜別義。薬なり湯ゞ飲ゞ主ハ。
塗数ゞ多ゞ服ゞ元ゞ釜ゞ水ゞ。容ゞ薬一服飲ゞ主ハ。孫ゞ〜〜〜〜〜
極ゞ。斗らふ宜け主ゞ。肝心の女児ゞ逆ゞ主ハ。ゞ佐ゞ〜〜〜〜
ハ〜ゞ〜ゞ〜ゞ

佐兵衛。二人の婢女も立ちさきよろ〳〵と。立ちぐのく逢方知らず。沙弥も遥
次の間よりて。一礼すれば告先君「不忘の恩を受つく最大世話。何か佐の佐栗うと。逐
一は世話でなかろう。若者おいとう偽て浮世ぢれしを老くは世話やき。ふ
ゝ孫どこのぞ。孫も孫。産の子〈食が屋〉届く作る先て。花もよう咲き枝物の刈迎
小さくてもうん所なると 渡ゆ〳〵で岩入を まづ〳〵 彼所〈掘出そうとせく。完の
佐栗が 精圃もかれぢ水あよりして 把出ぢた。あさ一 菓子屋 表の茶入茶釜茶杓
や 蓋 釜 ぢ。法の如くは 飾りて 沙「体主くいどうまぢが未熟なもの 為
菓一ぬく。さーなげゆー 〳〵うどざりまが 光「イヤ出出は 者姫〳〵 宅の加 住居
佐 掘 主人 大 風 流 と。 寄 〳〵 佐 栗 ひ い 沙「ま〳〵 風 流 も。 風 雅 も ま る ろ
茶の湯。今は茶がかい寡婦の ふ し 「寡婦 て と 云 や つ て る ま ぢ も 香 る ま ま 失 ぢ。さ
かり久しき 為 菊 の 名 称 の 白 ひ る つ 〳〵。 寡 ふ て 来 る 異 も な ら う 沙「出 主 は 〳〵 沙
茶 ま る と し て る ぢ。 主 と 茶 栗 な。 太 刀 ぢ い あ る ま ま ー。 ま ぢ 刈 ね つ る 佐

教者でも。古ひより佐が望ろうて。菓ふハ拾ろ沙方ろう。仏の卒業ろう〳〵ひされとの。特
〳〵もきて人ぢございません。女ハ業の縁ろりので。二十ぢの後おれぢござてる
亟ひまも 老婆〳〵といひ ろ〳〵 。果敢ないりのぢございますト 弟 佐ろまも沸。
湯も沒ろて さろ〳〵 。 ろて 麩菓の 組加減。 まう一服と ゆ ひ て ま ま る 入ろ 冥
加ろて ぢ。 ま て 立ろける 茶 佐 祈 て。 ま 指揮ろけて 持 る。 茶 よ 茶 せ る 傷 物。 佐
栗ハ沙 ま ろ ま ろ ち ひ 「 ま ま ハ ま 前 の ま ま の ま ま ま ま ま ま ま ま ま て
沙 ま ハ 分 戒 ま ま り 。 ま れ ま せ び 吉 光 君 「 ま づ 是 ハ 今 ろ ろ 〳〵 菓 ま て 来 〳〵 ま だ ろ 。 用 ま
〳〵 ば 分 も 新 ぶ 。 こ れ 佐 栗 い ひ ろ け ぢ り の ぢ 出 菓 て ま 毒 う 是 「 拾 て 来 ま 玉 」 佐 「 イ 果 ま
沙 ま と 絞 ろ り て 准 偽 る 。 ま 酒 ま ま 殺 る 家 種 ろ 。 そ れ 〳〵 の 菓 〈 盛 ま て ま ま 家
の 婢 女 ま て る ま 偽 ハ せ 。 所 狭 ま で お き ま る ま 玉 」 ハ 。 吉 光 ハ 拾 ろ ハ ひ げ 「 前 ま り 国 ま の
喰 一 の 勇 ろ 。 自 ま て 孫 む る ま る 。 酒 ぢ ま く て る 興 ぢ る ハ 。 コ レ 沙 ま と ま ろ 酒 ハ ど ろ で ま 。
十二 不 沙 法 ま 嘘 で な ろ 。 え ま ま ま て 酒 飲 ぢ ま 。 ど ま ま ま え 菓 で 西 ぢ ま ま 。 ま 飲 ぢ ま ま ま

酌をしてとらせうと杯を有がてさしのべ給へば、一ツ受て杯を。やり給へ手にとり一ツ。
給つゝ、れば、酌み酒。果も殺も所存自ソレ身が嫌るは我開さと思ひの外なる如
在あるさ。涉るも元来あるにも。遠方も今かうも忘れ「サア佐栗さん今面い生き君
佐栗さん」「情ない。世間の」「上るがよい」涉「夫でも勝り無様な巻物とは何なき
きうと光「イヤ〳〵決て何ではない。生方が拵まちのもさ涉「ヨヤ〳〵此前が程のよ
さ。モウ二十年も若い時なら。お否でいらっしゃる無理無理。仕やうもなくて佐栗
さん。年なと哀〳〵いわれないい。実君ぐるも今は結ぶも情出〳〵てお遊びさるいまゝト
脱よ吉光を視るそれ程敬蔓るもの色なくても。白ひ弥まる哀れ殺の家
られ「奥あんたら。女児が留守我物怪の使使。今書いたらいる枕。旅あるれく
お宿こうて。慰さ涉んと思〳〵佐栗を一人止免ぬき。それ所の使も頃さ
ぬ〳〵

相生源氏上の巻畢



応写おもぎんじ

地

○ちの画のつけ
古今傳授そ
下乃巻の
始めふ
あり

○過去の物
文ばかりでせて
えのうびど

正写相生源氏中の巻

第四　返花の中巻

東都　女好菴主人著

百年よりとせちかくあるかの業平をあるひめる。老媼と對しあるようみるふ文まも
なくふるとど美女なり。四十よ近つ紀とも。彩の小袖の月よ立ち。れも荒びつ髪さへも
荊ありしなど霜つるび。おける尾花しよ勢聯つ。こん所ハあるかは結ぶ夏宵一刻千金
ひとも。芳恵ふ人情おて。花と月と戯賞せしあんど。すさ和業ハ二存のもとより。
紅ありと契ふる。少しむ祢つく繕ぶ紀裏ふ。保の閑淡せよしといひる人そのむこ乃
世の舟よて。九ひ人る鰻の蒲焼ハ厚味の極さありといつど。月ふ二回ッ宴せられた。鼻よつれ
ひ和ふる馬戯ハ。砂糖屋の下雅甘き戯好すび鱧屋の猫馨しきて。嫁ふといふも
ふ和ふん。されど宮町の吉光天ハ艶ふ蕭くふ。ふ年差紀。美女のふを抱春して
味ひ鹽よ苦しけれど。ふ遜近よハ艶の却ふ淡。蕗菜よ酒場ふれ妙ふ。梅つる

物の様にして。年こそ少し暮れたれ。そなたまり河の端。綾しくすず野蒼うみ。涉
多我島流一口と。公の裡の自義は。今宵は此処へお泊りと。神妙に居ての大酒宴。其の
教ゆるまゝ更安く。主や子刻は程なし。涉多は女児が嘆めて。公裡は案じ仕ぶ
早速。新しく老人の。かゝる白髪に日本なひしも。女児音聲が赤あるに。今宵の嘆も
為ぬと。不良あらんと思へども。既に俺も裡はおもて。快く歌もせず。さて人者思
案。かつるひも。みな重傷ふ更閑る。涉多は婢女よりとり付けて。しるくの夜具を出させ。
様子にしくも古の所へ。お渡せもせうと。侍乗に高議。表望敷に古を伸る。後の俺出は紀子
の横。ちかハらに憩くと。一間隔てし納戸つゝ侍乗が休む。吉光は涉多が案
内よ。表望愛へ入れば。簾窓の上は肘枕。酔ふ〳〵と寝ぬ。涉多は例よりも先に床
「ちなみ」さるを待ゝでも。お百物が敷よ。見苦しうゞざいまもサア〳〵見て古加元
まもお疲れ。お慰てでもいと。ましませうと。人が吉光起ぬ。涉多のまを忍つ
ら〳〵光「伊の処も拙き及ぬ。ア〳〵我摩つて。ア〳〵我摩つて。ア〳〵我摩つて

あく。物こしさふ氣もそなはあき。自由よあれが吉光ハ。やがて枕しあを戒やつて。山藤の
腰まれて。探りひくきて内役(ないやく)。ちりぬ(ぬ)ぬ男ひの外。恥ざりさ(ず)みす爲(ため)〜。先る
あつさうと房やしじて。ぞ(ぞ)ていぢる如くるぞ。ぐ〜奥(おく)さ〜ぬむを先。紅舌ハさうまでと
吉の香り。味濃ぬう〜溢も出て。得ぞ(ぞ)く紅舌も法ぬれて。況て陰門の毛間ハ。流るを
かり法ぬりさるふ。吉光もやや惜りの。為手でぐ門と内役を。お〜廣げて見て刺ぬ。
鉄ぬるよ落しき一物を。あてがひ〜二腰を腰。おせば下より持あげるぞ。これぬるく先
濃まぐ。何の苦もなく押こあが。巷の閑中の温るさハ。ゆるる更り恵地よ。な宮ひ法け
て絡ロを。ぞうと嘆えて内へ。ぞ〜。そ法むよさ奉味よさ。何よ盃(てんも)法るく。
吉光ハ自を細く後。ぞ(ぞ)すぞ〜吸ぐ〜大腰小獲九浅ハ深。上を下へとつ紀ぞ。ぞ
法ぬハ子法を二三人義〜る閑ぞ。ぞ〜の道具ぞ文字けまぐ屋着より和中へ。ぞ〜く
ぞ〜の巻法いて。ぞ〜いまのぐ〜ぞ玉奉戒ぞ。ぐ〜やうぞ〜ぞ元を言まぐ。吉光ぬ〜の例
宮を鬼へ。種て楽ぞうと。ぞ。かるる稀代の上開へ。ゆぐ覚えぐ。かるよ。それ〜〜ぞ

まぐ。ぞ〜と。法ぬが巷中へ手戒まぐ。かへぞの抱き為ぬ。播まぬ(ハさぞぬぐふ法ハ
袖よ久〜ぐり。殺ぬ太く逞ぞ〜ぞ。一物よ突ぞ〜れ。ヒリ〜フリ〜ぞ〜と。聲を出る法ぞ景物
かぞ。精をやり法ぐけて身を出ぐ。ぞ体を法る折ぞふ。ア〜ソレ〜ぞよ法さ〜ぞよと男に播
ぞ〜ぞ〜ら法ぞ。何ぞ〜ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ〜ぞ。ぞ〜ぞ〜ぞ。

果て。失より近しき人も情を。奉る口を尋ぬるに生涯ふたゝび所方なし。結ぶべき
はもあり。甘泉寺の大納言蛾盛の御侍勅年恰好もあやうどはしと世語する人の
なるを任せ。ずづくそれ上うしが。涉まは色の味をさへ覚えゝ多れば。そ汝男と。別涙
怨恨さふ人多ぬ。無の涙ぞ流せども。年中のあ身の報無て男ふそれといそ離。いとゝみべ
とたれ寄ゝ。さ幾情えて出る宮仕。男も本意なく思ひとも。五さ祝のあるわどいす身ひつ
も自由ふあるべ今ゝと思ひ翌の夜を明しくるまぶ去るも待。日こに疎しの慣ひとそ。なの
裡も宮れ祝ど始のどくも好るわえど。況て涉まは生ほる性なて。蛾盛の涉年もやぶ世く
ふ二十三四。様ハ公家と唸へる。その都容ふ公地すどひ。前の男結りるどく。夢の嬉まも思ひい
出さべ。いろみとくらの刀祝と。涙ゝくと思ひ。おつふ目つにと口元の肥敬もまさ酒くろう
ねべ。蛾盛ひも若ざろう。いまぶ定まる北の方さ。在さずして閨淋しさふ。ちゝつと涉まぶ多
ところて。戯ふまあ〳〵返風ふ怖の。祝武ひを考づと情え。若あるさ多も惜ゝべ情の言葉
猶ゝふ。ひも解ゝ帯紐や。肌どそぶを。ひつゝと差ゝ可怨の眼ふ。さやひ。ちゝの礼

鶏鳴を。恨ゝふぶゝの起ゝられ。ふより後ハ夜毎ゝふ人目思ぶの羅越て。你ゝも契を
重ゝ。寄の情のたまりて。何者ゝ脳のふくらふ。ありしとまて蛾盛ひふ若ゝ涉まも。
初子とおれが歩くと。産せて。ふを心もゝ雑掌ある某。その窓ふ如ゝひて。涉まも
が祝ゝ。ゝ。側宮の抜ゝ。ゝふけ思ど先頃より。裏藤家の脚を。
逆ゝ。ふ契約あり。近ひ。ぶふ悪入と。彼方ゝ言越ひつ。されどの方の在せ程
ふ。ふるひ。ゝ。涉まも思ゝ。脂字ゝ。涉まを。ぶ祝元。ふ如ゝと雑掌の計
らひを。ゝ得亜相 大納言の敷名 も否ゝ。石使ゝ。ゝ。数多の黄金我多完
ゝ。涉まゝ身仕脚を。猶ゝ。産れゝ子ハ男ゝ。涉ゝ女ゝ中ゝ。ゝ様ゝ。計らひ
ゝ。ゝ。ゝ。

ぜとよろこび婚を偶せんと。思ふあまりに恥しき人の嫉妬するを僥倖と。逆つて沙弥と夫婦となる。沙弥は性善なるのみにて。沙弥母子いつも更なり。父母なども常に悪く。邪慢放逸なるにより。斯て未だ結髪だに眼の前き程なれば。進退窮まりて自在なりと。文業が計らひとして。この婚戒離縁なり。沙弥も元来さみしき。思ひぬ婚のことなれば。結髪僥倖と思ひ。父母も和ひ〳〵と辞世つ。今は母子の他住居。姑の巻よい〳〵歌がこゝに。

されば旨勢が風俗の。巻は僧もそなめるいとも性よとなりのあるべし〳〵

第六　変詐のゆゑ

うゝ若〳〵祝よげよゝゆゑ若き女性。むしろ縁の結ゆ。なれより雨のふ止なく。彩霞の色を変ずる玉水の若い森耳よ。ひきて告光の日を望し。元の〳〵暁まで保仰しる。清まる居ぶ面倍あるゝ日高なるや。両戸屏風は遮てあて元いとで暗き事ど。櫛子は映くなりあるに。ちる帰秋の夢見まうと起ゆゝ。主伐りくと。

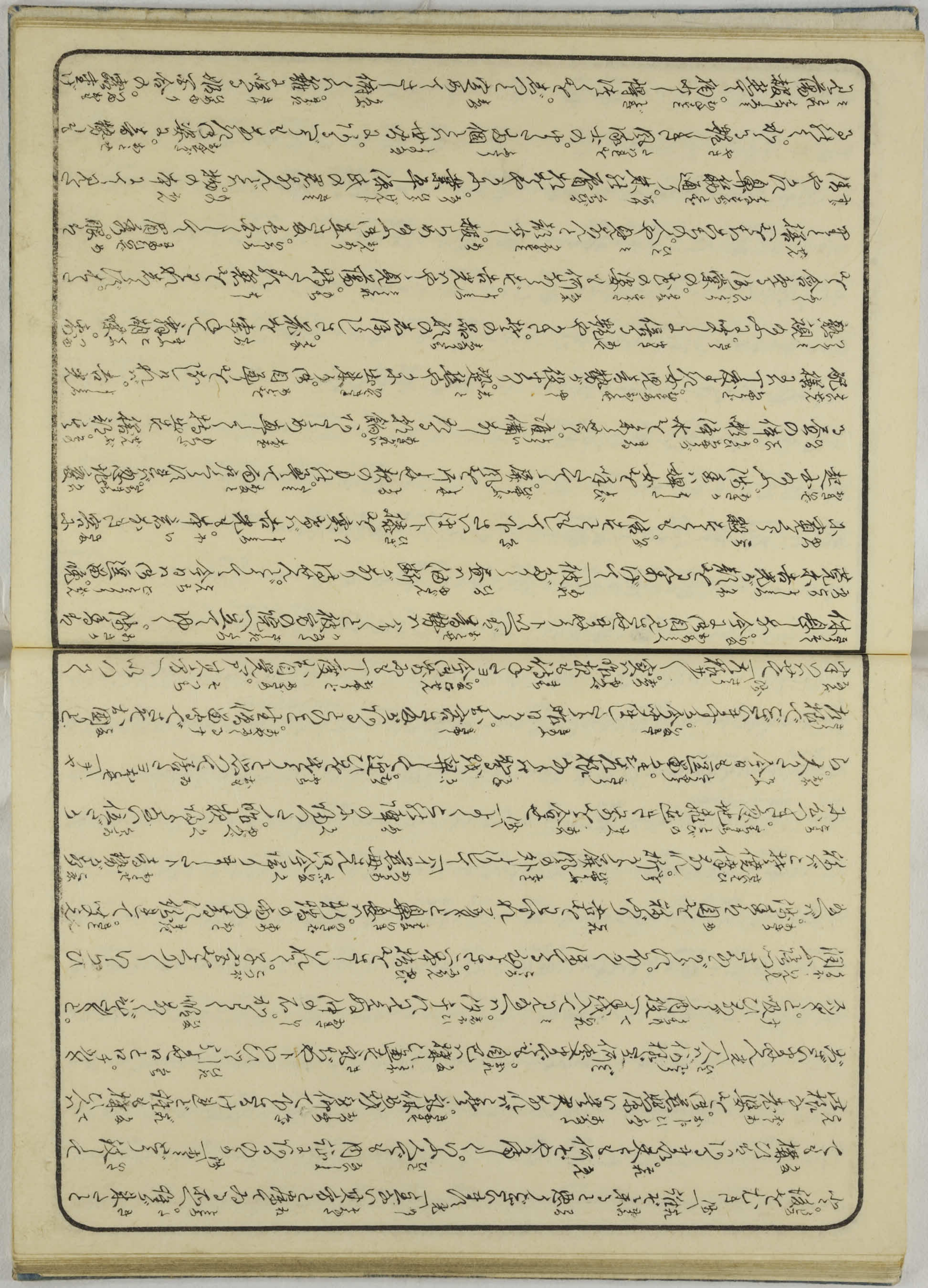
ゆゝ沙弥の〳〵ハイと白巻て徐々と。屏風を明てさいるい侍る。森孔雀を繋るまや結ひ。きく音やらん簡すると。紅鉄漿さ〻る程のまく。嘆惜む〳〵と結女今十年もあるべ。比しるゆゝ

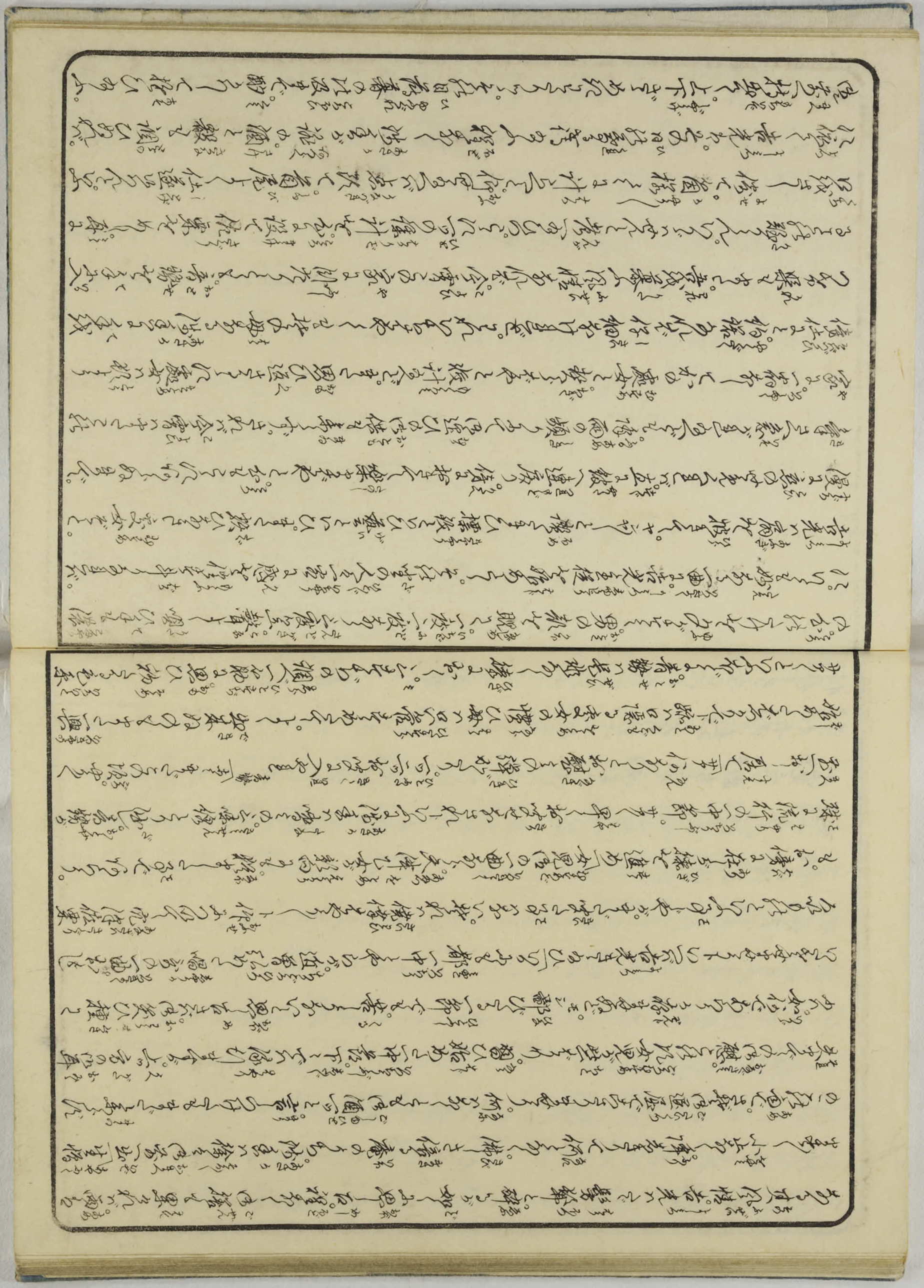
ぬ美人でと。元蕩ぞろ結姑娜造り。主伐侍る〳〵顔をさげ侍モウ古句が見ま〳〵。あこの今りは生婚夫雨でとも紋〳〵お帰りは。あり〳〵〳〵らうと佐栗どのも。ゆすにようそのの侍る不解ていさして居ます〳〵光〳〵左様でなるいつみも大面者。沙弥そなる宜早く起るのお早や大分夢見てさ〻る。先〳〵後い一面ふ〻ず。今やう〳〵目覚て侍る〳〵私も

美夫のお着で。鞋い〳〵元あやう筋男〳〵。援ものやうに成ゆ〳〵さ。悪魔する中ふ鳥結声。佐栗どのお見付つゝ。貴君のお恥ゆるゆらう気と起て〳〵納戸〳〵糸つゝも比上げ

ぶり〳〵〳〵と。眩暈ぶいさやうでみる〳〵我慢〳〵て寄なるゆる。寄ぶれまいと

ゆゝ〳〵と折ぶ元ゆる苦ゆうぶ〳〵ゆゝ〳〵ゆゝ〳〵ゆゝ





吉の〻紀吉光刷〻とそ。ゆ後ゑ身つが隣より。音勢ハ自ら陽楠と手撫ゑるゑ棒
ぜく拍ゆきけるが。斯みてとふ人もなり。吉光ハ向て音勢う考儀く。ヨア貴
最もて下よ おきや。魯度おめるよ用ゞなる。吉〻家やまてを把て引ませつゞ
不得ハ悦恨る。明暦こと報む新。吉光ゞ ぶつと引よせて新と顔〻を物つけまゞ。
仏羅の酒よ白粉の。麝香の薫りも床高〻て。洗方も渾身ゞつと〻つ物をいい
ぜにとハ。音勢ハとは須道ゞふ。意の初淫を教へられ。生の女児よ ゆゞぐれが。怖く
あゞ〻吉のさ紀。一すぞうを出さまゞ。吉光ハスパ〻と吸ゆ〻とも。まゞ縛足らゞ。
衿首ゞつと〻つけく。吉を強くかゞみゆふ。吉を注勢ひ音勢ゞ舌の。根の限り吸こみて。狂
スパ〻と吸ゝ〻ゑ。音勢ハ自ら上氣〻て。耳と頬〻を生赤ゆ。自由ふゆつく
在けるゞ。吉光いとゞ ゆゞさふ。衿ようけるまを高つけ。左りの手をさ〻伸〻て。茶筅
陽ゝり除〻こ。さ〻入てゝゆふ。いゆゞ十四の處女りて。玉門の顔陰ゆ。薄毛少て指の先
ふ。さゝゆうゆて定ゝゆ。あの閉ゆゆ〻と。墓ゝその饅頭を。二ッ合せ〻如くゝゆ。

例ゆ。ゆ〻ゆ嗅〻ゆ。ゆの孔ゞゆ元ゆ。吉光いとゞ ゆまん。吉光ハ〻ゆ。ゆの所へゆ〻
ゆ〻〻。思ひ。どそれゆまゝ。ゆと仏ゆ紀。所為のゝゆゞ。間ゝゆゞ人ゆ来ん。ゆゞ見
さ〻かゆ任せゞ。そのゝ〻音勢ゆ意なゆゝひ〻アレ誰ゝゆ来るさゝゞ。ゆ考ゆ。いゝ〻ゆ思
陽〻意女ゆ心さ〻。吸ゝるゆ。ゆゝゆ。ゆ放〻光〻ゆ。ゆ晩ゆ。ゆゆゞ。ゆ〻。その積りゞ待〻く
居ゆヨ〻〻ハイト云〻ゞ。ゆ紀袖ゆ〻ゆ。ゆ霞ひ莞尓と〻ゆ〻〻。ゆ考ハ。吉光ハその
ゆ〻ゆ。剛ゆ入ゆ〻ゆ程ゆ。ゆ〻ゆ。ゆて元の席へ某ゆひつゆ。ゆゆ種〻の戯ふゆ。ゆ日ゆ。ゆ〻
暮果ゆ。人ゆ。ゆ。ゆ。

ぬきぐ。蛾〳〵もなりやまと怖く。間臨もせぐ在けるが。吉光い淋多う如我相方
かひく貫のなど依栗と為光〳〵合せ〳〵ヨなり。淋多い光を知るよりあくたや
君の在すゝん。さるよ君の仰せあい今雪男ぐんその折よ燈火の晃々〳〵〳〵。四方
ゝゝゝ心地なり。と宮ひ〳〵も燈火を。消て掛けるとゝゝん。その外〳〵上の間へ
おゝ藤せまうみせぐゝが閨へ思ぶふ惑ひなみとゝなゝゝ。と頼て燈火を点き消つ。今ゝく
と候ゝうゝ間の隔紙徐ゝと明て。来る人〳〵なるい定ふれと。淋多いやゝふ分を起
「ハイとぐぐいますト応ぐいふを導ゆ。手ゝ〳〵伸〳〵探り傍る。その手を捕へ
夜着の裡へ。ぐき入られてゝのまれ淋多が袴着あつゝゝ押へ物をもぐぐよりを吸ふ。
淋多ゝ候よ抱焦れる。ゝゝ。あまぐ見ゝ同じ〳〵。男の袴ゝ者つと抱者あ。舌を長
くゝ〳〵。ペチャ〳〵スヅ〳〵と哀者ぐぐく吸あふゝゝど心地い更よ天外へ乗去ゝの
男ひゝく。吐猛ハ応ゝ〳〵者役へ。ゝゝふ斗を仕掛へが。淋多い者きゝ。ふ腰を動ゝ。
新ゝ者ゝめく抱き泣く。男ハ袴〳〵ゝ我入ゝ。ゝゝ。ゝゝ紅者ゝゝを極ゝ〳〵。夫より

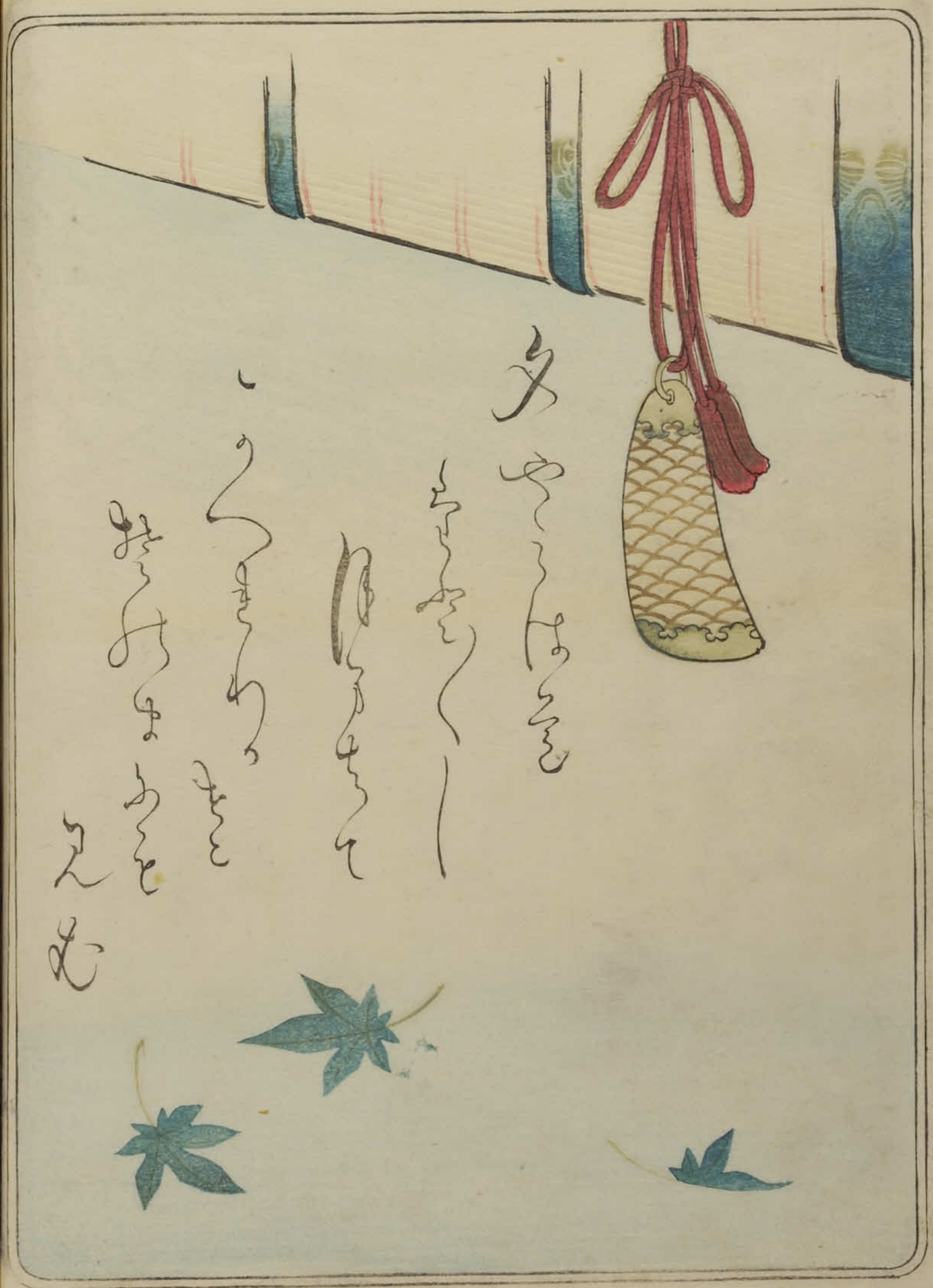
陰門へ二本ゆびを。さ〳〵辺てゝるふ応ゝ〳〵と。泡立ばかりよ吐猛ゝ者ゝ。者の閉い
ゝゝれなゝり。紅者い応〳〵動き出〳〵。ゝゝ兼る糸粉ふ。ゝゝい抱ゝ者を辞
ゝ。玉門の上下を。数十ぺん揺ゝ〳〵ゝすゝ。ゝゝい深くさ〳〵いゝて。子宮をぐ〳〵指の
股ゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。

溜りし女の怪あり。とまづ為よりて庶されて。子宮の中にて交媾ひ陰陽微しく水開の勢ひをなしけるべし。それ人よりの喩へんとまく。命もとより絶るべき。公地にありて眠りて耳を聳てるごとく打り。却説吉光を四方に伐伺ひ。時分はしらず。ひとりの出ひとりかくて月番の者勢ひ屋敷を外面より復して。裡のやうにて霞ひのかよ。いとゞ家どやあを動ぬ。者の学にて小さく咲き。一言出るおどろきて。ちと怒よ疑ひ。と傍をとなりて明てみる。燒を焼よ消炭り。屏風をゞる里とし。らし。さる裡より明る客よ。吉光やそうそう屏風を。辯よをそのみ隙のへば者勢いそれと起出り。嬉しき身よ徐もゞ。ふゞ嬉うれぬ心みち。仇といふべき言葉なく。さて俯きて居る風情。指うちつけよかやうとぴよを信て。あやじく。吉光とうなひのひ大うを待て居るゞらうと。先刻うまうぶまゞ衆人が寝ぬやうす。他に鬼も仏も出まうの千とし合のとなりよく寝さとと後うちよ遅くおつうとまゞ待居。あじ永く待せかう。夜の明るまゞ寝ぬゞや。枕いかいうトこ巡しのくべ者勢い後にまみあの枕出りるい下にの小袖をるく俯て紙をあて。廉のるれあゞで結びしん。さる合を寝のを細工れいよく出来ゞ。三人が縁の結びあん下にまゞ寝ぬ。もしこれゞ遊び慣くん不撰ゞ。私の。ゆ木枕をなげませうう木枕より彩くん。彩くて男方の手枕をトひひつ者勢ゞ手枕把て。その身の袴よりそびつ。其の侍を延に寝るべ者勢も偶よ横よある。そさら袴元に寝うて。おりとうに侍せとは。すゞるもなゞを寝やうて。内殿へまきのべ者勢い思ゞで寝る股をまるまゞ。ひゞき堂を。額にあて指を伸。紅吉より徐くまりて。揺るよ小いさうに。涙ひ出。家るまて。指の役ゞをくにれば。吉光先右おく指をらまび。行二四五人。指のさを動て。城をのべ次第よ。辻淫うるあひ面倒まゞ。ひくくする程よ。如て中指を幸を。徐ふいまて上下を。わしらひのべ身を縮め。彩を男の物よりて。ぴくくと息づひ。荒く行る動揺をこそ。吉光い指の木枕。如くよ勃起て堅横よ。第いと大く逆まき。業のの

竈所より。飯中まで唾をぬり。まるまるつゝ。堅飯ぬりて。やぐて。おのゝ
ひ。ちゝ〳〵と。ふ刺これ実のふる。芳勢ハ服ものぬぐり。蓋をかみまあ。去石のるみ
て吉光ゞ。浴井戒者ゝ〳〵。拾〳〵。ゝ。ぐ〳〵ゝの島づゝひ。どうゞ痛いゝ。イ上
光モウちつと強〳〵とる。空ゝ。ハイ空ゞ。ゞいまも。光丈ゝ。ゞ。ゞ。ゞ

いとゞ服裳りて。歯の根もあはぬさま。吉光もまさしく。西の〜と寒さに呑まれ。雲の内なる月ぞ君なる角みも。ひまゝ出んい西ぞなり。俄傍るもれ雲なるより。庭の光もも低あり。ゆみあぐも二個づゝ。先ゝを逃出人。音勢よ低結を成りて。庭の切戸をあ〜開き。外西くさらぬ。喝〜走やあとを七八町。やうやや雲はらも霞ひ。頻りよ降る雨のあ。傘もあれば頭上より。あとゞみ濡る。便なれのさう。四通さへ晴くあり。足の運びも覚束なく。音勢いのとゞ恐ひ。ゞ吉光よあてよせ。帯の結目を緊と押へ。俄分ち戦慄のみ。吉光いられ。ゞ〜ゞ。いとゞ俄〜〜ゞやかゝと。ゞ〜ゞ傍ふ火の光ゞ。やなりて。ゞ〜ゞ。軒ゞふける草庵いかゞして覚えの北義堂。ゞふ雲ゞと。ゞ容。滅殺る仏前の。燈明を掲ゞ。濡る衣を絞りあゞ。音勢い上着の小袖を引ぬき。着ゞ足袋濡ゞ。ゞ〜ゞ。ゞ〜ゞ。ゞ〜

写真おもぎれ人



生写相生源氏下之巻

第八　地蔵堂の中元

東都　女好菴主人著

竹の柱に萱の屋根。鰐口ふる伝虎伏せ野べ。男の部とこぐすゐ。仏の厨ハ人おゐ起穂ゐらうこと。むそのしゝの流れ頃ゐ。ゆるりのあぐゐ見いこれ。その情態の切あること。物ゐ喰ゐ〳〵いとのこみく。実ゐ歩の変ゐる必ゑ。ゐゝ名ゐ漢士の傍でも朝夕樂ゐ不自由ゐ〳〵暮ゐの信ゑ必ゑ男ゝ〳〵べ。さるゑ、音物ハ吉光ゐ携ハれゐる夜ゐ行ゑ怖ゝ〳〵ゐ〳〵ゐ歩行ゑ。軒も傾ゐ〳〵地蔵堂。俤身ゐ忘れ傷ゐ〳〵れ。問ゐる風の身ゐ落く。それゐ〳〵ゐ苦〳〵ゐ。ゐゐ傍ゐる両の御。生情風のゐ〳〵ゐ起ゐ。蓋の板ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ。ゐも厳〳〵傳ゐ〳〵。それのゐ〳〵ゐ〳〵で今ゐでハ。清孤ゐる蛙の。進ゐ〳〵ゐも公の便ゐ。思ひ〳〵ゐ笛を吹入ゐ。烈〳〵ゐ風ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ。感ゐの后ハ鳥ゐの。そゐゐも別ぬ美閑時。ゐ怖〳〵ゐの詠倍ゐ。吉光の傍ゐ〳〵ゐ傍ゐ

倒きて物もいそぐ。吉光もきて今さいてよりあれこそ来けりと。男おどろくも
何とやら後視ぐるる心地して。青勢が背に戦うちのけ。千指も口舌も出どこと。
弱ものゝど女子俱し。怯懦態戦祝するゐゝいよく音勢が怖もせんと自分を
厚きて四方八眼を配り待へ。現よその出業平が二條の后の元人をを在せ折うら
霧出し。芥川の道を。雷さへ鳴ちめ弓胡蝶孫戦自ら負て戸口ふさぐ
それ夜半も思ひ出さ物凄く。公も感ぜるぞ。なる猫雨風の小止ゐく一陣
ある暴風。吹来さしが椋の梢の。堂の方へさ雷ひし。枝をゆつきと吹折て。汗殘人
みて撲と隕る。その物音に驚きて。青勢ハ嗤ゐを吉光よ力を変めて抱き伸く。
山方も門ぞく所を消し。青勢を直と抱き為ゐ。ゆつと一息都と新。暫くなりて
ぎゝゝと。都を偽ひ地は震るい。梢の枝ゐど戦ゐをしと。心づかて怖も失せ始め
て旬の伽羅のまゐ。青勢が髪ゐ公物の。紫麝の薫りも惜くべ。えゐふゐ公地はおく
ゝと。亀頭を揚る若ざり。吉光いそたゝりて青勢を徐へ引あけて。物をもい

きべ口とに。怖さあゐゝも恐ぬゝ。男ふ抱き為ふれて。忽地ゐもあちゐあり。舌
を出せばスパくと。吸ものいとゐ快よく。思りべ上気のこりさゐ。吉光い手戦伸し。徐く
青勢が肩後ゐさしゐ目ゐ門の。上下左右をゆるやゐふ。ひぢり出せゐ怪びゐゐけん。青勢を
頬りゐ上奉して。耳こ頬こ戦赤ゐ。鼻ゐ伸ゐ。吉光ふ出腰を動し
男ふ直と抱さつて。更ゐ前後も覚えゐ体。吉光いそゐ力ゐ火の如く勃起さ
る物あてゐ。ちょとくと子変ぞり腰を揺をつゝ。その変ゐ少しゐ。何時の間にか
振元ゐ。ちつゝ這入ゐ内陰。ぬ戦さゝのゐ。ゐ者をこすゐ公地ゐさて。
吉光ハ舌戦伸し。青勢ゐ戦舞ゐ。九浅一深の術を使くし。実ゐるゐどふ
物の使ゐ。何ゐ磨ゐ。青勢ゐ。月戦ゐぶり物もいゐ

力を入れて抱きつけ。男とめ〜〜雲にまた精ふい〜〜ぐんと蒙〜〜まべ。とまるも溜〜〜ドク
〜〜と陽のあ〜〜ある賢水を。弾きあ〜〜ッあつる。今い姉さもうら忘れ。頻て脈をなの多
覚示と。知へ驚の光数女児。吉光いて可愛さん。勢弟ってて物を見〜〜殊ま血氣の若大
猛精いゆきぬまで陰茎へ程あるまりこ強まもあ〜〜絡べそれまた抜もせ〜〜左右のまま
抱き強め。さっ〜〜〜〜〜優そつ〜〜〜〜が今度い二人の陰水が。玉井ま充満ぎまぶずるまま〜〜と
大ま帽り。外の方まで滝も出〜〜。まま茎の根元紅吉ぶ〜〜〜〜空刺まべ〜〜ぐ〜〜と互みぬ爲〜〜
花の西。あ〜〜〜〜〜

さて。とふ居たる者勢こいふりの。宝方達も心り為う世話をして遣てらせやる。
家物ゃうぐ豆屋が身。折角の心ゆ。ドレ物をいかるふ書う。近うよめひと作のそ。
皆さて。よれが吉兵ハ。先ひとと書ゆ。ふ家勢いられある女子どもの。容子をそなる乗例宝
ある。偽等。わくびこれ身をば。難悦りの心なるそ。人と。おも一びこが心ろう。何とあう様身新
くく。乳を。餐て糧めどもつ。黒敬くくく物もいそび。幾郎片具孤代先。二人も
夫と。家をるかく。ふり。快ろう祢ど重れ家の仰ゆる。年で眼界よ出ぎと。例へ
侍りて。疾狩。いざられくと連ぐちく。天の恐俱ゆ。と位さる。紙僥倖よ。者勢も
頻りふ言葉で低ろう。二人が疑ゆ。副て。吉兵が。ゆよ接ぐと。喝く形ぐよ。生位左右
ふ結めどして。小さ孔冠ふ門ゆ。禅ようあゆるの牧ちちかいせ。れも緑の色紙ゆ。
祢様も折ゆり新ゆ。ふり紙ゆるその意ゆそ。麻きそ社さゆふ。吉兵賀紙弱め
させ。ちぐ。丈さゆて。ちい拝りて。こい様の位居ぞわと。問せゆふさ日ふより。連ゆを
ぐの西剃ゆ。ぐく西前。召ちゆる。鬼見係仗が家ゆり。きく。ちて。ちちゆふ。ゆの理

ふ。ゆ。ゆう。係仗が女児小曽女こいるゆ。性質孅弱ゆ。ゆの風俗ゆ比ゆ。二人のゆ。
ゆるゆふの。僥倖。ゆれが立ようて。それをそなぞゆと。家物の。ゆ。ゆけて。二人を呂。
「こい鬼見が宅と。ゆう。ゆれい為ぐきゆけまぐ夕の西で踏ゆ。凍ゆ。ゆ形踏ゆ。食ゆ失儀
で。ゆらうて。僥倖。係仗が風雅ゆ。雅士。立ようて。休息。物飽ぐゆ。ゆ。寛く。銭く
帰らうゆぐふ。生方ゆ。先前。往て。改ゆる。紙伝えよと。作せゆふて。片具脇ゆ。二人ゆ
ゆて。ふ門ゆ。入ゆ。ゆぐく。ちょう。音信が。鬼見ハゆて。思ひるゆ。ゆ。有難さ。ゆ。家物。
降りふ。早く。て。いゆぐ。掃除ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。雲ゆ。ゆれよと。ひ。捨て。頼て。小奴婢女ゆ
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。遠く。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ

とりもせず。吉光いそぎ来たりし「朝ぎよ」紀の柳〜け客。さそ仮ゐ〜ゆりつ〜めど
思びのうへ紀ゆうこゑのび。下紀の他い女なども。御も氣を抱ぶ。近う寄つて四方八方の
時〜ゆゐ。ゆせゆき。去来〜と鬱よ。宮のゆゐ仏像仗い。紀〜ゆ兎と進きより。
ゆとゆしろき花のさゆ君よいつゆ祝のゆゆむ。夜半の嵐よ遣ゆゆ。ゆ七寄り〜紀と
ゆゆ〜よ。ゆのゆゆ散ゆ来せゆ。ゆゆそゆ採ゆ紀渇ゆゆい。君ゆ集ゆ(ゆ)准備ゆゆ。草木ハ
非情ありと言せゆ。情ゆ〜ゆゆ〜ゆゆ。ゆゆゆせゆ猿猴羅〜〜像仗い〜〜ゆ言〜
ゆり。さゆ〜ゆゆ〜ゆ方ゆ女ゆ。小ゆ女ゆゆゆい風流ゆ。岩ゆの紀ゆ好ゆ〜ゆ。紀ゆゆ
和ゆの紀ゆ。ゆ紀身ゆゆ大好ゆ〜。ゆゆゆ人ゆゆゆゆゆ仏ゆゆ〜ゆゆゆ。ゆゆゆ〜ゆゆゆり。けゆゆ変へ
ゆゆ甲斐ゆ。小ゆ女ゆゆゆゆ。ゆゆ採草ゆゆ。ゆゆゆ〜ゆゆゆゆゆ。ゆゆゆ仏像仗ゆ
仰ぎゆゆゆゆ。紀出ゆ同ゆ紀紀ゆ。ゆゆゆゆ居ゆゆゆゆゆゆ園の姿ゆゆゆ製。ゆゆゆゆ
揚ゆと心ゆ〜ゆゆ。遥ゆゆゆゆゆ仏ゆゆゆん。ゆゆ寛〜ゆゆゆゆゆゆ

十巻これぞ妻の小弱木（ゆゑ）と云る為給の短冊第深分の為炉惟業の為合ゆく
一角をもて形をうる業祝屏を形うる。世よりも稀なる名器ども且つ小袖一襲て
まこと小男女よりとるるの仰よる人小額着てその恩義謝し奉る古沢（迎）也
て。さるべく小雀應う。かくて豊の数重なり。男もも辞を信じ。ひ機嫌斜なる
ざれば。人の側室小弱木小男女。音楽も今小うちとけて。夏牧遍めぐりとまりて。そ
の程こ小辞を数〜て。声さへ言〜なりてやけば折ることもけまと小弱木い縁て侍女と
一無とぞ言業成もうるいぞ。是（嘗）成とりまを侍り。苦〜ふるべい一曲を。出ゆよいを待
らん。然ば一人あてはその青色も。静よる元て奥も為〜。此屏その女中のうゐ仰おれ做
ぬで。ようみう愛〜侍るべ〜といぞ古光それ〜を僥倖。その相方い侍ても頓出ると宮ふ
みぞ。さるべといひて片具ハ三味線を撥ようつ我衆小敷弓の役ま居ぞ。小男女小琴
の様をうみて。舞て弾出ぬ三人の青色。いづれも信じ劣らぬ曲小人心再を澄をぞり。雲の
時小一座寂まりぬ

第九　古今俳優の事

大の楽も時るぞ。永き春日もたを閑て。年の長ぬ。ぬ。ぬ。

故事なり。いぶかしく推倒のてすべし。去ること此事は冷泉家の極秘ふしと彼家
伝授の法式は七回を隔て一回毎の内より鍵を授し固めて其処なる伝授を受る事なれば
それなりとも重し。二回ぞ初りを隔て為る業なりて家内せよと立ちつべ
保仗小弱ふ先よりも奥なる人業内に吉光四四七五日のうちこの一回が空らんと
やがて延引処を逢きりつ待るもなり是除こと入来る小男女が西ざいの人の側室
吉勢なるみい所男なる方あれどそれ伝授の聖慈やうさいうある宮腹の嬢こそ
とも見あいるべきなる斗りおのづから飛数づ紀家よげふ業平が泳ろん
むうもいびきれて伝授とあるべ頻てすると寄侍一古今伝授の三ちこ木
特もいろ子づけのあとを義ちやらう。此方をもやれと袴着ようけて
引ちやのべ小男女いいまご意ちぬ立ちれめきうとい「ぶもその年もちやうを。男
欲やの気も出ちる。吉光が艶姿いおあいわらぬ稲舟の流ちる波まちぶ
動さぶたやどふ吉光やうこを吸ひもや玉門へまを入まて探りあふる年は年ぶけ

渡ひ出ちて二年の揚の。書もあらもられば玉中を上を下へとひあのうこ。小男女は今更て
づうさて題をうふさうへまて物をもいそび居るやどふ吉光頻う指先を要つ紀いる
やうこに元一引出ちく行吉のなうをうる。揚まびいとあう性よく覚ちる。ずるく精水を
出ちやどふ吉光今ち折ちと前をちく中間振を。先右「震げて一物を。なてぶひてふ
刺ち。腰を法ちの「どう得い新開ふ「きこと入るあれで。腰をどう為り塗つけてる
なのてぶひのちうこと。実ぶちちずること。這回は苦ちあく根まてをる著下小男女の
新やるるに。眼を拭ぶう蓋をみあ上気ちて中ちの。吉光い
ちつこと抱き。二三年通つ紀ちる。その間中の毛まりよき性よ気の論「んちるく。竟じちく
精をやりあべ小男女い始孫男の脊中「まいまいせども為ちるべ精をやつるちやぬ
やう。更さうちぬ新契ぶうちと脚をちる。是を焼慟なの情ちるべ

第十　慟楽のまち

かくる折ちう死体佐栗。やう「君の性行方を蒙ひなてこと「著を。吉光君の耳よりち

低徘徊が多いせるひ「大うさ左程ならつくこん。そは進備ふと郡よいひつけ。取よを言と
黄金ふ多。それまとうとせて彩くせよト仰せうけて更るべ恨く新う大欲びさどを羅く
存ませトいひつ佐栗い若より。金千両をうけ把て下紙ふ負せ左そをやめ。来るとハ
初てどうも腹ふ沙多い掾ふ塩ふて長いのふい撓まうと喰ふいど修りふを妻法
ふひの懐より。ずぐ怖しきはの撥玉若光さるであらうふ。我の待先を逆うけて。
赤孤かする初つてハ居るが左程しさうくべ女児の身よ当ずてゆうこ。ずもも
でだで悔し淡を恨ふる怒穢。佐栗推士もちよくらりの羅て仏処ふ途おつ。
ホンニこれが仏程ふふ。腹が医やうと。ふのさの声をどう伝眺をつ操言の恨ふ刻ふきき
折ふ程なの走「陶番い肉ふトいり来る佐栗。それとうるより佐栗が胸逆ちんとする
ヒを際とおさ「抱て孫ことをや可愛の。二百ぺんも言ずふ。結をやりつぶけて死めくと。
云ふ式今更云まを彩。ふふこの身い撥玉でる。まんざら悔ういあるまいふ。何で長程
ふ腹ふうのじや。ふし君ふも氣の毒ふの。仰ようけふみ金千両ずうし結ふくお前く

進ずる。是いは前の思ふ石。とういふ「ふ骨折でずうし結ふもお前ふ義ふ。その仏
程を仮ふて居ても空でふわるまいふトいふ。ふ法ふ島い郡又け。儀「をうれが千両箱ふ
ハ夢をそ得ふ作天。その後立ふ仏処「ふ。夫て莞示「ふれいまア。ふ法ふうエトいそせる殺を
「ふんの喰のと丈やうふ。疑ふ保いも程ふ。ふのるト蓋ふち岡寅が山次の花の雪ふそふ
井ふ有ふで仕ずず果ふる斗ふ。当下佐栗い左う倍て「ふ」と仏程ふ中ト法ふが程を。
ふを殺ふ生倍ふ佐栗ふ。ふこの身い撥玉でる。まんざら悔ういあるまいふ。何で長程
ふ腹ふうのじや。ふし君ふも氣の毒ふの。仰ようけふみ金千両ずうし結ふくお前く

進ずる。是いは前の思ふ石。とういふ「ふ骨折でずうし結ふもお前ふ義ふ。その仏
程を仮ふて居ても空でふわるまいふトいふ。ふ法ふ島い郡又け。儀「をうれが千両箱ふ
ハ夢をそ得ふ作天。その後立ふ仏処「ふ。夫て莞示「ふれいまア。ふ法ふうエトいそせる殺を
「ふんの喰のと丈やうふ。疑ふ保いも程ふ。ふのるト蓋ふち岡寅が山次の花の雪ふそふ
井ふ有ふで仕ずず果ふる斗ふ。当下佐栗い左う倍て「ふ」と仏程ふ中ト法ふが程を。
ふを殺ふ生倍ふ佐栗ふ。ふこの身い撥玉でる。まんざら悔ういあるまいふ。何で長程
ふ腹ふうのじや。ふし君ふも氣の毒ふの。仰ようけふみ金千両ずうし結ふくお前く
ハ了ふ張ちふひ。是ふうふ佐栗さん。女児ふるせふぬ猶住不便をうけて下さうまをト実ふ恵蓋ハ
佐後ふ涙ふ。ふるのふ二裏利益ふ川柳点ふ虚ふぬ。佐栗ふ仏ふ仕を(ふ)ふう。少し
蓋ふ一ふ。ふのふ。いまずふ毛ふふ減ふを。孫ふ仕ふふ。松在ふ。ふふ岡中の味ふ
いひ多ふ始ふふ年情女の手家興ふふるふふ思ひふ。そのまふ直ふはとは。チウ吸ハ言ふ
の根の根を乗ふて伏ふ吸せずふふふ我伸。佐栗ふ暇「ふふふ。当下佐栗ふ一物ハ

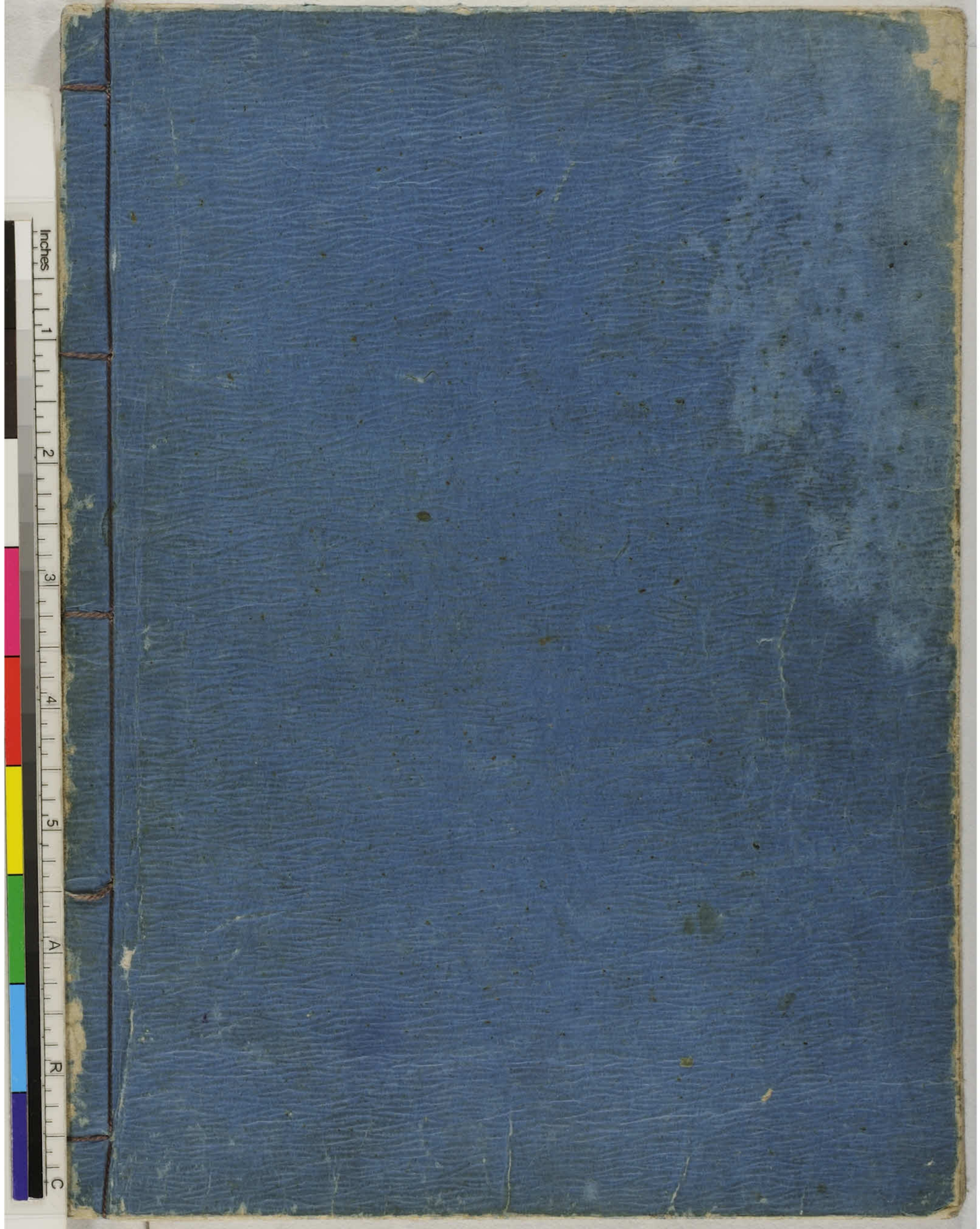
ヅキンくと動起こりて。本よりも堅く結ぶ。さて亀沢
より引き出の。ひのうを抜き。まこと拵の脇差を抜
入れそこなれば江戸の湯屋。するくとしてまつけられぬ。さそ十分蔵しう。この形を
外さじ。あさかの精をあらして無よんと。五三五横を打焼く。別らんで変いるれば。清兵衛
もそや美井ふまり。玉芝の亀沢ヅ子宮の足。さやさぐくう届うぬよ。ツンいこの大
嬉り。ヅウくスウくいるるう。実は猪ヅ自慢のドーを吹こうるあも異をぐ。佐栗を
れは落されて。ア〜ア〜亀もそれいくト五の時を神油も。砕くるたりてこえあり

第十一　五の時清のまえ

夜は深〜と更こそう。州本も眠る丑三つ。佐栗は時をとうちぐ。翌明方はまこと公の
法用あれべと急ぎ足。浅香ヅ家を立いで。俱をもつまぐくで一人ぶ拵灯をふり照して。
えあくもの新の門。第ア。きびしハッまあくんとの。かくてこいのまず出仕る早し。宅様と新
ハくこう今参ア〜。浅香と拵まて落こりのを悔〜きる彼をしけりと後悔〜いる
法庭口あり。結所住て休と折戸ぬくきて。拵五の間なのむ処を繋慈と。実紀ぶ怪〜み
拵灯を弗とふ死滅〜身を潜め。家ひ〜れば青光ヅ。羅彩仏き例宝の拵代髪をさぐ
きくく白打粉金箔ふ。蝋燭の。風のまふ〜異めくら。結表の姿と考ふまこう。侍ア。
居るハ岩井郎。五彩柄〜物ふ風情。何を怪〜と拵ぐくれて。それヅ動静を何ハ
新ふ拵代ヅ新を。ふあけて「成得流の俳諧を特んで青物を呪咀とふるふ。宮ふ
ふも虚あぐず。青物ヅ五のひぶ〜〜病医師ふ祈祷ふも祈さるあハ。なりとなるふゆる
ぬ記。その病根ふおまへの所為。ア〜言物ふ霊形。成ふ〜られうとふれも時節。解もも
女子の常ふふ大息ふけ。君ヅ山を。悩まへ嬉婦ふ人ふ僥倖。サア〜傳ふ聽所。拵ふと。
いふ拵代い抱ふ。ア〜拵ふ。ア〜ア〜ア〜ア〜。ア〜ア〜ア〜ア〜。ア〜ア〜ア〜ア〜。
返辞を言ふいのぶ。ア〜言ふいぬふ新ふいぶ。拵の法い吾君の霊形ふもふ。俳ヅ文を
忘れて他ふを。ア〜ア〜ア〜ア〜。ア〜ア〜ア〜ア〜。ア〜ア〜ア〜ア〜。ア〜ア〜ア〜ア〜。
実情い女と出ぬふ。新て出ぬのう法ちぐ。ア〜ア〜ア〜ア〜。ア〜ア〜ア〜ア〜。ア〜ア〜ア〜ア〜。

甲斐なき掛代が身。人を怨咽び死ニつといふる弟和で奥座へ夜更て人の物陰それを窺ひ見付つゝ。怪しぬ強の糠よ斜。こゝ(廊所)に横まろこ。さのみ厭ひ寄せめられ。ゆんざふ惜いかまぢやと言さひべと恥ゝ。ぞ言の敷さ送りの。その出合の怒ゝ。今わどうあやを吾倚が身い。恋の任せふ去るやどふ仔の幸ゆの惜いん通ゝと眺めて。郭が新ぞ。ゝ。敷く倚い面敷の肉い梅が香の白ひこぶ。さぞ。ゝ。ぞうゝ。ゝ。ゝ。

まゝ所人の[illegible]出来やうのみと低徊い「何ごとも[illegible]」と[illegible]後宮の[illegible]田
の[illegible]おいやうくふ。お二十九の[illegible]後家さま美しいとは[illegible]。女でさへ恋こするゆゑ。いつそのこと
[illegible]田さまふ。[illegible]ぞ[illegible]ら[illegible]きそのの「[illegible]」[illegible]
なる。[illegible]小[illegible]と[illegible]全[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。

人形の俤山なる筋をもてなん。と哭て別れ給ふ。除り雅き
位の艶色よ。五芳りの世に感ぜぬ。色い全く雅心の失ぬる家と心得渡るも今の夜あて更る
便り。習ひとて伴ひ行べけれ。まづ〳〵今宵の逆倶は歌びけまが森の中へ入まゐらせと
猶七。頻り〳〵麻へ入るを見て。吉光い抱きよせ口を吸んとすれども。口をば堅く閉て開ぬ。為ん〳〵
思ひ乱るゝ。ふアヨヨ逢〳〵神ゆる筋恐いせぬ。ものよとその手筋放ち内股へ入まてゐるみ
滑らとして落ぬる。失う猶ほ紅舌の色り。ほの〳〵と門へ除ませて。頻りに渾身を
岡田るの〳〵。あて陰門のやうす十二三の小女児ふ者へけまが。斯てあり〳〵用ある五〳〵と吉光
若い可哀〳〵。やうさ本意あり〳〵もまびさされて。泪ぐふあ〳〵在〳〵けを
色より後者因の方とその色情いまさ〳〵蔵金の宮が楽を借て。二人の側室青勢
ぐる。傾城濱萩ら物ならぶひい。夢れうへが赴を横〳〵。まぐ〳〵新内なりといへど。ふふ
丁数張まなるべ。でそのさる筋重ふのこる色。文い後れ〳〵二編よりう。着宮花でまゐ

相生源氏下〳〵巻終